

―はじめに(これまでの経過も含めて)

本校は、平成８年度から３年間、文部省(現文部科学省)小学校英語活動研究開発学校の指定を受け、カリキュラム開発や指導方法研究等も含め、全学年年間１０５時間の指導計画を整備し実践を積み上げた。平成１２年度、それまでの英語活動の在り方を見直し再検討をしたところ、成果と共に克服しなければならぬ多くの課題にも直面した。具体的には、「総合的な学習の時間」のねらいと本校で実施してきた英語活動のねらいとの整合性の問題、身に付けた英語を生かす場面の設定の在り方、児童のニーズとカリキュラムのずれへの対応、ALT(英語指導助手)中心の指導方法に対する疑問、さらに教材開発やALTとの打ち合わせに要する時間確保の問題等々である。

これらの課題をどのように克服していくかという議論と平行して、本校の児童にとって英語活動が必要であるのかどうか、また、英語活動を通して「どのような子どもの姿」を求めるのか等、多くの時間を費やし話し合いを重ねた。

なかでも最も大きな課題であったことは、「今後、本校で求める英語活動は、(研究開発校の時と同様に)カリキュラムに基づき英語を一方的に児童に与えることでよいのか?」という問いに、私たち教師集団が、どのような考え

方とスタンスで臨めばよいのか、という点であった。

そこで、平成13年度から「英語嫌いの児童をつくらない」「楽しく身に付く英語活動の創造」の二つを合言葉に、豊かなコミュニケーション能力を育むための英語活動の研究・実践に着手した。平成14年度からは、前述の課題を克服するためにESL指導方法を導入し、全校体制で新しい英語活動の創造を目指し、実践にあたった。

## 二 英語活動に必要な三要素

本校ではまず、これまでの実践の成果に基づき、英語活動に必要な三要素（左記）を共通理解した。

さらに、英語活動は、単独で行うよりも国際理解教育と関連づけて単元を構成した方が、それぞれの要素を位置付けやすく、児童の活動意欲や興味関心を高め、持続させることができるという点を全教師で確認した。

### 英語活動に必要な三要素

- どのような内容（表し方・言葉・言い方等）を伝えたいのかという【児童のニーズ】
  - なぜ必要なかという【児童にとっての必然性】
  - どこで使うのかという【児童が使用する場の確保】
- さらに、これらの要素を核にして、本校が目指す英語活動の姿を具体化した。（本校の「英語活動における目指す

子どもの姿」は略)

三 「楽しく、身に付く英語活動」を求めて

(1) B-SLIMの導入と指導方法の共有化

本校で導入した「B-SLIM」は、カナダ・アルバータ州立大学 *Oenka Bilash* 博士が提唱する第2言語教授モデルである。*Bilash's Second Language Instructional Model* の頭文字をとって「B-SLIM」と呼んでいる。平成13年度、筆者が、北海道教育委員会からアルバータ州立大学へ派遣され、*Bilash* 博士のもとで学んできたESL (English as a second language) 指導方法 (= 教授モデル) である。

現在の私たちの英語環境は、英語学習の場面以外では英語にふれる機会が少ないEFL (English as a foreign language) の環境である。その中で、あえてESLの指導方法を導入した理由は、以下の4点である。また、その4点は、本校の英語活動の課題を解決し、本校が目指す英語活動の実現につながるという考えに立っての導入でもあった。

B-SLIMは楽しいアクティビティをスモールステップで積み上げていく活動を基底に据えた指導方法であること  
(= 楽しく身に付く英語活動の実現)

B-SLIMは児童の心理的な側面 (自信や達成感等) や主体性を育てることに目に向けた指導方法であること

（「英語嫌いの児童を作らない英語活動の実現」）

B-SLIMは指導方法の共有化を可能にし、エゴト（ホームルームティーチャー）が中心となって進める指導方法であること

（「指導法の共有化を基盤にエゴトが行う英語活動の実現」）

B-SLIMはOutputの段階を国際理解教育の単元や学校的生活場面と関連付ける事が容易な指導方法であること

（「充実したOutputに繋がる英語活動の実現」）

平成15年6月JASTEC（全国児童英語教育学会）大阪大会、及び同9月北海道英語教育研究会旭川大会では「B-SLIMを基盤にした英語活動」を標題とした研究実践発表を行い、共に先進的な実践と全校体制での取組、質の高い活動を進める児童の姿に対して、高い評価をいただいた。

さらに、平成15年9月と同16年2月、同17年11月の三度にわたり、B-SLIMの考案者であるBi-ash博士を本校に迎えて授業研究会を開催することができた。英語活動を参



観いただいたBi-ash博士からも、本校におけるB-SLIMの先生方への浸透度（先生方の理解度）と児童が生き生きと英

語活動に取り組む様子に対して、高い評価をいただくことができた。

(2) カリキュラム開発

「ロングレイドカリキュラム」に基づいた実践

児童が使ってみたい英語や使う必要のある英語を言語材料にして活動を進めるためには、学年別・月別の指導計画では弾力的で柔軟な対応ができなくなる。そのことから、本校では、平成4年度以降取り組んできた英語活動の実践をもとに言語材料を全て洗い出し、それらを20題材・2コース(Basic course / Advanced course)の計40ユニットのロングレイドカリキュラムに編成し直した。

(ロングレイドカリキュラム)

本校では、各学年年間15(20)時間を英語活動に充てている。また、どの学年の題材を扱ったのかかわかる

ロングレイドカリキュラム (一部)

	greeting	Self-introduction	weather
B A S I C	Good morning Good afternoon Good-bye Hi. Hello See you Thank you You are welcome Nice to meet you	Hello. My name is ~ I'm ~. How do you do? I'm in the ~ grade. My nickname is ~.	cold hot warm cool rainy cloudy sunny fine  How is the weather today? It's ~.
A D V A N C E D	How are you? I'm fine thank you I'm sleepy I'm sick I have a cough (headache fever stomachache runny nose)	I'm eight How old are you? Where do you live? I live in Asahikawa. What's your name? What ~ do you like? I like ~.	windy snowing foggy  How is the weather in (place) ?
	Body parts	animal	shopping

上記以外の題材は以下の通りである。

class/school month/season days of the week color  
counting numbers / time sports face adjective  
gesture /Verb place direction / guide food  
culture Asahikawa  
(追加) ○ Hokkaido ○ sightseeing ○ gesture ○ school area

ように、英語活動実施後「スタディメモリアル」に記録し年度末に次の学級担任へ引き継ぐことにより、系統的な指導ができるように配慮している。

このことにより、本校では

- 児童のニーズに基づく英語活動
  - 国際理解教育の単元と関連づけた英語活動
  - 日常の学校生活に生かすことのできる英語活動
- を実践することが容易になった。

(3) 学習過程の工夫「調べ学習」の導入

児童が使ってみたい表現や言葉をもとに英語活動を構成することは、「教えこむ英語活動」から脱皮し、「児童が主体的に関わる英語活動」への転換を図るねらいがある。

さらに、「調べ学習」を位置付けることで、前述の英語活動三要素のうち「児童のニーズ」(どのような英語を学びたいのか)と「児童にとって英語活動の必然性」(どうしてこの英語を学ぶのか)の二つがクリアされるのである。

本校では、総合的な学習の時間において「学び方」を身に付けさせることをねらいに「調べ学習」を重視している。

英語活動における「調べ学習」については、筆者が考案し、その実践を「子どもが生き生きと活動する英語活動」(教育出版社刊・第8章)で紹介をしたところ、多くの学

校から問い合わせや資料請求等が相次いだ。

一方、児童にとっては、多様な調べ方を身に付けることができるようになってきたと同時に、カテゴリーチーム内で効率よく分担をしたり、互いの環境（聞くことのできる環境・調べることのできる環境等）を生かしたりしながら「調べ学習を」進めることができるようになってきている。

四 Outputの充実を求めて Outputの充実が、児童の活動意欲を高め、質の高い英語活動を実現する

B-SLIM では、「身に付けた英語を主体的に使ってみる場」として Output が重要な位置を占めている。本校ではOutputの場を可能な限り、国際理解の単元や英語活動の終わりの段階に位置付けて実践している。

そのため、児童は、「この場面では、この表現を使って交流したい。」という見通しや期待を持ち続けながら、英語活動に取り組むことが可能になった。

Outputを意図的に組み立てることにより、英語を積極的に身に付けようとする児童の意欲や態度が高められ、それに伴い児童のコミュニケーション能力も高まっていくことを実践の中で明らかにすることができた。

また、Outputの場面で英語を使って交流することができたり、使用した英語が認められたりした時（賞賛されたり

した時)に、児童はそれまでの取組に自信を持ち、もう一段ステップアップした意欲で次の活動に向かうことも同時に確認することができた。

本校では、高学年も含めて、児童の活動意欲や積極的な取組や態度が持続する理由として、Outputの充実を挙げることができる。その具体的な内容は次の4点である。

#### 英語活動の日常化

双方向の国際交流活動（出向く活動・迎える活動）  
学校行事等における発表活動  
姉妹校交流における活動

#### 英語活動の日常化

本校では、言語材料と学校生活を結びつけ、毎日の学校生活の様々な場面で英語を使うことができるように構成している。児童は、学校生活の中で毎日くり返し使うことで、無理なく英語を身に付けることができるようになった。

#### 実践例（１）

- ・「学習のはじめのあいさつを英語で」（一）（全学年）  
取り上げた言語材料

～ Now start ( finish ) the lesson. Japanese, math, music, PE, art and craft, ～

・「朝の健康観察を英語でやってみよう」(一学期)

取り上げた言語材料

How are you today? I'm fine. I have a cough ( fever, headache,

stomachache, sore throat, runny nose )

### 双方向の国際交流活動

中・高学年では、国際理解の単元と関連づけ、どの場面で身に付けた英語を使うことができるのかを明確にして学習を展開している。本校では、児童のニーズを基盤に据え、「出向く国際交流活動」と「迎える国際交流活動」を積極的に進めながら、その場に活かすことのできる英語活動を推進している。

実践例(2) 「出向く国際交流活動」

・「フレンドシップパーティーに参加しよう」(高学年)  
自分たちの課題を解決することの他に、学校にゲストティーチャーとして来てくれる方を探すことも目的の一つとして、旭川市国際交流委員会主催の上記パーティーに学級全員で参加することにした。旭川市在住の外国人の方と英語で交流することにとどまらず、ゲストティーチャーとして来校を要請する表現や自分たちが現在どのような学習を進めているのかを説明する表現等を学習した。

取り上げた言語材料



設等の他、道案内の仕方、行き先がわからなくて困っている人への声のかけ方等についても学習を深めた。

#### 取り上げた言語材料

～ city hall, art museum, library, bank, etc. May I help you? ～

Where do you want to go? go straight, go back, turn right, turn left etc. ～

#### 学校行事等における発表活動

学習発表会等の発表活動で、保護者はもとより地域の方々へ英語活動の成果を発表することは、児童にとっても大きな自信となる。本校では、英語ボランティアチャの協力を得て、児童の発達段階に応じた取組を進めている。ここ数年は英語劇の発表が多く、「ももたろう・うらしまたろう」(E15.9月:5・6年) 「大きなかぶ」(E16.9月:1・2年生) 「金のがちょう」(E17.9月:5・6年) を上演し、高い評価を得ることができた。

#### 姉妹校交流における活動

平成14年より、旭川市の姉妹都市であるアメリカ・イリノイ州ブルミントン・ノーマル市METCALF小学校との交流を開始した。現在、手紙や写真・作品等の交流を始めとして全校児童による交流を進めている。昨年度6年生は、姉妹校に送る「英語版 学校案内・日本紹介ビデオ」を作成した。さらに、質問したことがらに対する姉妹校からの

回答を素材にして、国際理解教育（総合的な学習の時間）の単元を構成するなど、単なる交流の枠にとどまらず国際理解教育の内容を充実させる役割を果たすようにもなってきている。

##### 五 成果と課題

今回、平成13年から約5年にわたる実践をまとめてきたが、その中で多くの成果と共に今後私たちが実践を通して克服しなければならぬ課題も明確になった。

以下、4点にわたり成果を示す。

BSLIMの導入により、本校の教師全員が英語活動を行うことが可能になった。ALTとのティーミングにおいても、英語が可能な限り英語で指示を出し活動を進行し、アクティビティー等をコントロールしている場面を多く目にする事ができた。また、実践を積み上げることが自信となり、本校の教師全員が英語活動に関わっていきこうとする積極的な姿勢を持つことができるようになった。

開発した教材を英語活動室に保管し、誰でもが使用可能にしたため、教材開発のための時間が大幅に短縮することができた。また、繰り返し使用する中で改善が加えられることにより教材の質が高まり、使用しやすくなってきている。Teaching Planも同様に、英語担当教師が一括保管し、

学年別にデータベース化してあるため、指導プラン作成に関わる時間も大幅に短縮できた。

「ノングレードカリキュラム」に基づく英語活動の充実を目指し、実践をもとに加除修正を重ねたことで、内容が充実してきている。児童が使いたいと考えている英語をもとに構成する英語活動が軌道に乗り、全ての学年で質の高い英語活動を展開することができた。

また、「スタディメモリアル」や実践の記録等の交流・活用により学年の引き継ぎがスムーズに進み、系統的な指導を行うことができた。

現在本校では、授業のはじめや終わりのあいさつ、朝の会での「健康調べ」等学校生活の様々な場面で英語を使う機会が増えている。児童の自己評価の結果からも、私たちが願う「楽しく英語を身に付ける」「英語嫌いをつくらない」が実現に向け着々と進行している。

一方、今後克服しなければならない課題は、次の2点である。ただ、これらの課題を解決するためには、現在の総合的な学習の時間における英語活動が今後とも踏襲されていくのか、それとも教科性を帯びた「英語科」が導入されていくのかという明確な方向性や展望が示されることが必要である。

これまで同様B-SLIMの理論を実践研究することの他に、英語活動に携わる教師個々の英語力を高めていくための研修の機会や方法を具体的に考えていかなければならない。

現在旭川市では、筆者が代表を務める小学校英語活動研究サークル（AEEN）が組織され3年が経過している。ワークショップや教材開発・指導方法研修を中心に活発な活動を展開している。このような外部団体との効果的な連携が、この課題を解決する一手段となると考えている。

現6年生は、昨年4月の段階で全てのコースの学習を終えていることから、現在の「ノングレードカリキュラム」のBasic/advancedの両コースにbrush upコース（仮称：文型を中心とするコース）を新たに設け、再編成を進めていく必要がある。また一方で、将来教科としての側面が重視されていくことも視野に入れながら、カリキュラム研究やtextbookの編集等にも着手しなければならない。

## 六 おわりに

当初、B-SLIMの導入やHRTが中心となる英語活動の実施に対して抵抗があったのも事実である。教師にとって従来のALT中心の英語活動であれば、カリキュラムの内容に合わせて英語活動を実施し、ALTの指示通りに動くことで事足りるのである。自ら英語を使ったり、英語活動を計

画したり、国際理解の単元と関連づけて単元を構成したりする必要はないのである。

しかし、本校では、「国際理解教育や英語活動を通してどのような子どもを育てたいのか。」「どのような英語活動を求めなければならないのか。」という真剣な議論や研修を重ね、段階をふんだ着実な実践と児童の姿に立ち返る検証を繰り返すことで、ようやく現在の英語活動に到達した次第である。

ここ数年、「博報賞」(国際理解部門、H12)「馬場賞」  
「下中賞」(共にH15)「日本英語検定協会 研究助成」  
(H15、16)等を受賞し、全国的に本校の実践が高く評価されてきた。また同時に、全教職員の創意で築いた実践は児童だけではなく、教師自身(指導の在り方)まで変容させてしまうこと示した5年間でもあった。

このように、全校体制のもと、英語活動に対する明確な考え方と実践にあたっての工夫を伴いながらEFLの環境に適した形でMSF指導方法を取り入れることは、大きな成果を生み出すことを実践を通して検証することができた。

今後とも、北海道の地から全国の小学校に「実践の成果」を発信するという気概を持ちながら、取組を深化させていきたいと考えている。

(終)

